＜総括＞

出題数	現代文　２題・古文　１題	試験時間	１２０分

・ひとつの歌に仮託して、言葉の習得と言葉の本性についての考えを示した随筆からの出題。
・本文の分量は昨年度よりも数行増加している。すべて記述説明であり、設問数も五問と変化はみられない。ただし、解答欄の行数の合計は昨年度（16 行）に比べ 17 行とわずかに増加した。
・本文分量、記述分量ともに大きな変化はなく、総合的にみて、全体の難易度も、ほぼ例年並とみられる。
・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問四がなく、全四問の出題となっている。

＜本文分析＞

大問番号	一
出　典 (作者)	奈倉　有里　『夕暮れに夜明けの歌を―文学を探しにロシアに行く』
頻出度合 ・的中等	なし
分　量 前年比較	分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）
難　易 前年比較	難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）
一	随筆	問一	記述式	標　準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄３行) 傍線部に至る内容をたどり、「幸福状態」の「特殊」さを「私」のありようと関連づけて説明する。
		問二	記述式	標　準	傍線部の心情を説明する問題。(解答欄２行) 「逃げ場がないような崖っぷち」という表現にどんな決意（決断）が現れているかを説明する。
		問三	記述式	標　準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄３行) 「新たに歩きはじめる」という表現を慎重にみて、何がどう更新されるのかをわかりやすく説明する。
		問四	記述式	標　準	全体を踏まえ歌の理解を説明する問題。(解答欄４行) 冒頭の歌について、全体を踏まえ、要点を絞り込んで、説明する。問五との書き分けがやや難しい。
		問五	記述式	標　準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄５行) 引用された歌の歌詞に「触れつつ」という指示があり、本文の趣旨を踏まえた説明が求められる。

※難易度は５段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

・一ではしばしば評論や随筆がとりあげられている。だが、いずれであっても、文章の主題や筆者の主張を全体から的確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
・設問のそれぞれがどのような意図をもっているか、その狙いを見極める訓練、その理解に応じた記述の練習を積み重ねておく必要がある。

© 河合塾　2024 年

＜総括＞

出題数	現代文　２題・古文　１題	試験時間１２０ 分

一昨年は随筆の出題、昨年は評論の出題だったが、今年は詩人で彫刻家の高村光太郎による芸術論が出題された。初出は一九四一年（昭和十六年）で、旧仮名遣いを用いた文章。やや古めの文章を出題する京大の傾向を踏襲したものと言える。設問は、何を書いたらいいかわからないという難問こそなかったが、問五などやや説明に苦労するものもあり、論述問題に慣れていなければ苦労したと思われる。

＜本文分析＞

大問番号	二
出　典（作者）	高村光太郎　『永遠の感覚』
頻出度合・的中等	なし
分　量 前年比較	分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）
難　易 前年比較	難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）
二	評論	問一	記述式	標準	傍線部を説明する問題。（解答欄３行） 「至極当然なことである」という傍線部を、直前の文脈の芸術観を踏まえて説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。（解答欄３行） 「其処へニヒルが頭を出す」という傍線部の「ニヒル」について説明する。「ニヒル」が「虚無」という意味だと知っているかどうか。
		問三	記述式	標準	傍線部を説明する問題。（解答欄３行） 「芸術に於ける永遠」が「感覚」であり、「時間」ではないということを、対比的に構成することが必要。
		問四	記述式	標準	傍線部を説明する問題。（解答欄４行） 傍線部前半の「真に独自の大ききを持つ芸術作品」と、後半の「直ちに人にうけ入れられない」を丁寧に説明する。
		問五	記述式	やや難	傍線部の内容を説明する問題。（解答欄４行） 傍線部前半の「さういふ明滅の美」の内容を的確に説明するのが難しい。

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

・文系二では、評論（芸術論）が出題されたが、随筆や小説を含め、できるだけ多様な文章に接しておくことが肝要である。こうした点は、出題ジャンルが固定されている他大学にはない京大独自の特徴である。
・文系二では、古めの文章が出題されやすいことは留意しておきたい。旧仮名遣いにも慣れておくことが必要である。
・問題に取り組む際には、文章の主題と絡ませながら筆者の考えや思いを本文全体から大きく把握するとともに、個々の文脈の趣旨を的確に読み取っていくことが肝要である。その上で、理解した事柄を〈簡潔かつ分かりやすく表現する〉といった訓練は欠かせない。

© 河合塾　2024 年

＜総括＞

出題数	現代文　2題・古文　1題	試験時間	120分

・中世の日記『とはずがたり』からの出題であった。
・三年ぶりに有名作品からの出題であった。
・2014 年度に同じ作品から出題されている。
・2023 年度と同様本文に和歌が四首あり、そのうち三首が設問に関わっていた。
・解答数は昨年と同じで五つであった。
・2023 年度にあった漢詩は本文になく、漢文・漢詩の設問もなかった。

＜本文分析＞

大問番号	三
出　典 (作者)	『とはずがたり』 (後深草院二条)
頻出度合 ・的中等	出典は頻出　出題箇所は稀
分　量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約690字 (前年は約1120字)
難　易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	日記	問一	記述式	標準	説明問題。 和歌の上句「つれなくぞめぐりあひぬる」の内容説明。「つれなく」の内容、「めぐりあひ」の内容を具体的に記すところがポイント。(解答欄２行)
		問二	記述式	標準	「適宜ことばを補いつつ」という条件付きの現代語訳問題。「漏れ」の主体の補充、「給ひ」の尊敬語の訳、「世にあら」の具体化、「ましかば……む」の反実仮想の訳、「などか」の反語の訳、「申し入れざらむ」の謙譲語と助動詞の訳、「申し入れ」の内容がポイント。(解答欄３行)
		問三	記述式	標準	「適宜ことばを補いつつ」という条件付きの和歌の三・四・五句の現代語訳問題。比喩部分と実意部分を区別するところがポイント。「いたづらに」の訳、「海人」の掛詞に注意するところもポイント。(解答欄２行)
		問四	記述式	標準	説明問題。「いづ方」、「捨てらるべき身」の具体化がポイント。(解答欄３行)
		問五	記述式	標準	「直前の和歌の内容に基づいて」という条件付きの理由説明問題。「なほもただ」の和歌の内容と、その和歌が詠まれた状況を踏まえて説明するところがポイント。(解答欄４行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2024 年

・有名作品からの出題は、京大文系古文の一つの流れなので、以前も出題されている『源氏物語』を代表とする平安時代の典型的な文章にも慣れておく必要がある。
・近世の随筆・歌論からの出題も京大文系古文の一つの流れなので、論理的な文章にも慣れておく必要がある。
・今年も和歌についての設問があった。修辞、現代語訳、内容説明など和歌に関する対策は必ずしておきたい。
・今年は、漢文・漢詩の問題は出題されなかったが、2023年やそれ以前にも出題されているので、漢文や漢詩を読む練習はしておく必要があるだろう。
・現代語訳は、人物の補い、指示内容の具体化などわかりやすい現代語訳が要求されている。本文全体の現代語訳ができるかどうかが京大文系古文の根本である。文脈を踏まえた現代語訳の練習がいちばんに望まれる。
・心情説明もよく出題されているので、慣れておく必要がある。
・時には、古文常識についても出題されるので、十分に学習しておきたい。

© 河合塾　2024 年